「オルガンあげます」顚末記

田中三保子

わが家に古ぼけたオルガンがあった。こどものときに、父にねだって買ってもらった板張りの足踏式のものである。愛着もあり、オルガンの音色も好きなので、できることならずっと手元に置いておきたかった。しかし、次第にものは増え、狭い家の中にそのスペースを確保することがかなわなくなってきた。かといって棄てるには忍びない。あれこれ考えた末、区の広報紙の「あげます」欄を思いついた。葉書で申し込みをしたら、大分経って、「十五日の区報に掲載いたしますが、二、三日は電話が集中することと思います。」という趣旨の電話があった。「よろしくお願いします。」とか答え、いつか忘れてしまっていた。係の人の言葉に、それこそ文字通りの意味が込められていたことなど気づくはずもなかった。

電話のベル。恐らくずい分鳴らし続けた後、やっと受話器をとった。時計を見ると、六時四十分を指している。こんな時間に一体誰かしらと少々腹立たしい思いである。というのも、普段であれば起きていなければいけない時間なのだが、この日は年に一度あるかないかの遅い出勤日だった。疲れもたまってくる頃で、もうしばらく眠っていたかった。電話の主は女性で、「今、新聞で

みたんですけどオルガンをいただきたいのですが。」という。オルガン？　ああきょうは十五日だっけ。深い眠りから引き起こされた頭を無理に醒めさせながら、とりあえず「どなたがお使いになるんですか。」などと尋ねてみる。「娘がピアノを習いはじめたんですけれど、とてもピアノまでは手がまわりませんので、是非譲っていただきたいと思いまして……。」「有効に使っていただける方にと思っておりますので、事情を伺ってから決めたいと思いますが……。」相手の人は何やらとても急いでいる風で、朝早くから申し訳ありませんけれどと云いつつも、折角一番目にかけたのだからどうしても私にとなかなか電話を切ろうとしない。さしあげられるようでしたら連絡をしますからと名前と電話番号を聞いて、やっと放免してもらった。

ふとんに戻ると、程なくまた電話のベル。やはりオルガンの件らしく、先の電話で目が覚めてしまったという夫があれこれ尋ねている様子である。私の身体の不調を気づかって、夫が早朝分を引き受けてくれた。「それでは欲しいでしょうね。」などと答えている声がとぎれとぎれに聞こえてくる。好意に甘え、頑張ってもうひと眠りと思うが、うとうとすると電話のベルの連続で思うように眠れず、観念して起きることにした。夫はまだパジャマ姿のままである。やむなく、まるで幼児にするように着がえさせる。夫は受話器をもちかえたり、シャツをかぶるために「ちょっと失礼」などと電話に云ったりしている。なにしろ、受話器を置けばベルが鳴るという状態である。朝食も合い間に少しずつ詰めこんで、いつもより遅れて夫は出かけていった。さて、私も仕度をしなければならない。思いのほか時間をとられてしまったので、ゆっくりするわけにはいかない。だから、もう出るまいと思うのだけれども、ベルが鳴れば、何か事情のある方かもしれないとつい受話器に手が伸びてしまう。そして、私も遅れがちに出勤。

ここまでで、三十本以上の電話を受けたことになる。二番目の人は、とこれは後から聞いた夫の話。四歳の子のピアノのおけいこにというのも、まるで最初の人と同じ。前にも同じような申し込みをしたところ、一番最初の人に決めましたといわれがっかりしたので、今回は少しでも早くと思って電話をしたとのことで、なるほど最初のひとが急いでいた事情がよくわかる。三番目も四歳の子のピアノのおけいこ。次は保育科の学生がピアノの練習用にと。また四歳の子のおけいこ。またまた四歳の子のおけいこ。このひとはしきりに家が近いことを強調した。この後も、四歳の子（中には二歳の子というのもあった）のピアノのおけいこ用にというのがなによりも多く、私達はメモもとらなくなった。将来幼稚園の先生になりたいという高校生、教職課程の大学生や保母

の方、趣味でピアノをはじめたおとなのひとなどからも電話を受けた。マンション住民を中心に、幼稚園にはいる前の子どもを集団生活に馴れさせるための会を作っているのだがというのもあった。楽器がひとつもないのだという。その他、火事で高校生の息子が大切にしていたエレクトーンを焼失してしまったのでという母親、オルガンの技術をもっていて教えたいからという若い女のひと、小児マヒの子の手足の機能訓練に是非足踏式をという母親などなど、心を動かされる事情のある方も多かった。さし迫った事情というほどでもないひとには、こういう方もいらっしゃるのでと説明すると、大抵は理解を示してくれ、却って「大変ですね。」「頑張って下さい。」と労の言葉をかけられることもあった。これは大変嬉しいことだった。なにしろ、ほとんどの電話に対しては、「御期待に沿えなくて申し訳ありません。」と謝らねばならなかったのだから。中には、初めから貰えるつもりのようで、「音は全部でるんでしょうね。」と聞いてきたり、大きくなければ貰ってあげてもよい、大きいと家にはいらないからと言い出す人もいたりしたが、不愉快な思いをさほどしなかったのは、考えてみれば大変なことなのかも知れない。

足踏み式であることは、今や貴重らしい。例えば、大正生まれという女性の話。この人からは何か執念というようなものを感じさせられた。初めて貰った給料でオルガンを買ったが、疎開のために手放してしまった。戦後買ったものもピアノと入れ換った。今頃になって懐しくなり、あれこれ手を尽して探しているのだが、電気式ばかりで、足踏式が全く見つからない。だから手放すべきではないと説教をしてくれ、オルガンの音の良さを褒める。更には、相応の金額を支払うから自分に譲ってほしいと交渉を始めた。(不用になったらぜひ私にと、譲った人に伝えて欲しいとの達筆な葉書が、翌日、この人から届いた)。こうなると、何だか手放すのが惜しくなる。無理しても置いておこうかしらんなどと思ったりもした。

帰宅してからも電話は鳴り続け、そろそろ電話のベル恐怖症にかかり始めた私達は、その夜、休む前に電話器をこたつの中に入れ、丹念に座ぶとんをかけた。次の朝早くにも、微かにベルが鳴っていたようなのは気のせいだろうか。さすがに二日目、三日目と電話の鳴り方は少なくなり、四日目、六日目にそれぞれ一本ずつ鳴ったが、以後ぱったり跡絶えた。

誰にさしあげるかということでは随分迷った。というのも、私としては本来の楽器らしく使っていただけるところに譲りたいと思っていた。ところが、事情のある方でも、大抵は何かの代用品として、オルガンを欲しがっているようだった。ピアノを手に入

れることができ、あるいはもっと高級なキーボードを得たときには、顧みられなくなるのだろう。それではあまりにも悲しい。かといって、それほど上等な品というわけでもないし。できれば、ちょうど私の子どものときのように、子ども自身がとても欲しがっていて、でもなかなか買ってあげられないというひとがいたらいい。その子がブカブカと存分に楽しんでくれたら、オルガンも本望であろう。結局、私が抱いていたそんなイメージに一番近いと感じられた、十何番目かの電話のひとにさしあげることにした。

息子は小学校一年生で、当人がとても欲しがっているという。主人が事業に失敗して、今新しい仕事が軌道にのりかかってきたが、まだそこまでは手が回らない。子どもも事情はわかっているらしく、区の広報紙を心待ちにしていて、その朝になると、ママ、これ来たよと持ってくるのだという。

直接持っていくといって車に積んで出た夫は、私が心配した通り、家がわからなかったといってそのまま戻ってきた。その辺りの地理には強いはずの夫でさえ知らないような混み入った場所だったそうな。翌日、改めて待ち合わせの連絡をしてから持っていくと、スラックスをはいた女のひとが、にこにこと立って待っていてくれた。三角布で片腕をつった少し太目の男の子が、嬉しそうに傍に寄ってきて、「学校のみたいだ。」といった。アパートの部屋（だから昨日は見つからなかった）へ運ぶと、彼は使える方の五指全部でブー、ブーと鳴らしてみた。母親は、指一本ずつで弾かなくてはいけないとやさしくたしなめた。デパートの配送品を届けているような気がしたと、夫は帰ってから話していた。おみやげに、夫は、何種類もの荷造りテープを貰ってきた。それは、せめてお茶でもというのを断って（人みしりが強いので）帰ろうとするときに手渡されたもので、以前に仕事をしていたときの製品だという。

数日後、その方からの分厚い封筒が届けられた。「伝統工芸」という雑誌の創刊号であった。主人がすべてをかけて作ったものなのだという。ページを繰ってみると、取材記者、それもただ一人のは当の奥さんのようであった。お礼をしたいのだが、今の私達にできる精一杯のことがこれです。続刊を店頭でみかけるようなことがあったら、仕事が順調なのだと思し召し下さいと端正な文字で綴られてあった。そして、最後に、息子は早速二曲ものにしましたとあった。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）